

久助君の話

新美南吉

青空文庫

久助君は、四年から五年になるとき、^{きゆうすけ} 學術優等品行方正のほうびをもらって来た。はじめに久助君がほうびをもらったので、電気会社の集金人であるおとうさんは、ひじょうにいきごんで、それから、久助君が学校から帰ったらすぐ、一時間勉強することに規則をきめてしまった。

久助君は、この規則を喜ばなかった。一時間たつて、家の外に出てみても、近所に友だちが遊んでいないことが多いので、そのたびに、友だちをさがして歩かねばならなかったからである。

秋のからりと晴れた午後のこと、久助君は柱時計^{はしらどけい}が三時半をしめすと、「ああできた」と、算術の教科書をパタツととじ、つくえの前を立ちあがった。

外に出るとまばゆいように明るい。だが、やれやれ、きょうもなかまたちの声は聞こえない。久助君は、お宮の森の方へ耳をすました。

森は、久助君のところから三町はなれていたが、久助君は、そこに友だちが遊んでいるかどうかを、耳で知ることができたのだ。だが、きょうは、森はしんとしていて、うまい返事をしない。つぎに久助君は、反対の方の、夜学校のあたりにむかって耳をすま

した。夜学校も三町ばかりへだたっている。だが、これもよいあいずをおくらない。

しかたがないので久助君は、かれらの集まっていそうな場所をさがしてまわることにした。もうこんなことが、なんどあつたかしのれない。こんなことはほんとにいやだ。

最初、久助君は、宝蔵倉ほうぞうぐらの前にいつてみた、多分の期待をもつて。そこで、よくみんはなはキャッチボールをするから。しかしきてみると、だれもない。そのはずだ、豆が庭いっぱいにほしてある。これじゃ、なにもして遊べない。

そのつぎに久助君は、北のお寺へいった。ほんとうはあまり気がすすまなかつたのだ。というの、そこは、べつの通学団の遊び場所だったから。しかし、こんなよい天気の日にはひとり遊ぶよりはましだったので、いったのである。が、そこにも、たけの高いはげいとうが五、六本、かつと秋日にはえて、鐘撞堂かねつぎじょうの下に立っているばかりで、犬の子一ぴきいながつた。

まさか医者の家へなんか集まっていることもあるまいが、ともかくのぞいてみようと思つて、黄色い葉きいろのまじつた豆畑のあいだを、徳一君とくいちの家の方へやつていった。そのとちゆう、ほし草の積みあげてあるそばで、兵太郎君へいたろうにひよつくり出あつたのである。

兵太郎君は、みんなからほら兵とあだ名をつけられていたが、まったくそうだった。こ

んなうなぎをつかんだといって、両方の手の指で、てんびんぼうほどの太きをして見せるので、ほんとうかと思つていつてみると、筆ぐらいのめそきんが、井戸ばたの黒いかめの底にしずんでいるというふうである。また、兵太郎君はおんちで、君が代もろくろくうたえなかつたが、いつこうそんなことは気にせず、みんなが声をそろえてうたつていると、すぐ唱和するので、みんなは調子がへんになつて、やめてしまうのであつた。だが、わる気はないので、みんなにきらわれてはいない。ときどき鼻をすこし右にまげるようにして、キュツと音をたててすいあげるのと、わらうとき、ゆかの上だろが道の上だろが、ところきらわず下にくるがくせがあつた。

たいそう 体操のとき、久助君のすぐ前なので、久助君は、かれの頭のうしろがわに、いくつ、

どんな形のはげがあるかをよく知つている。

兵太郎君は、手ぶらで、へんにうかぬ顔をしていた。

「みんな、どこにいつたか知らんかア」

と、久助君がきいた。

「知らんげや」

と、兵太郎君がこたえた。そんなことなんか、どうでもいいという顔をしている。また

んぼうのはしを、大工だいくさんがのみで、ちよつちよつとほつてできたようなその顔を、久助君はまぢかにつくづくと見た。

「徳一がれにいやひんかア」

と、久助君がまたきいた。

「いやひんだらア」

と、兵太郎君がこたえた。赤とんぼが、兵太郎君のうしろを通つていつて、ほし草にとまつた。そのはねが、日の光をうけてきらりと光つた。

「いつてみよかよオ」

と、久助君がじれつたそうにいつた。

「ううん」

と、兵太郎君はなま返事をした。

「なア、いこうかよオ」

と、久助君はうながした。

「んでも、徳やん、さつきおつかんといっしよに、半田の方へいきよつたぞ」

と、兵太郎君はいつて、つよいかおりをはなっているほし草のところへ近づき、なかばこ

ろがるようにもたれかかった。

久助君は、徳一君のところにもなかまたちはいないことがわかって、がっかりした。が、兵太郎君の動作どうさをみたら、きゆうに、ここで兵太郎君とふたりきりで遊ぼう、それでも十分おもしろいという気がわいてきた。ほし草の積たぐまんであるところとか、つぼけ（藁積）のならんでいるところは、子どもには、ひじょうにたくさんのお楽しみをあたえてくれるものだ。そこで、久助君も兵太郎君のそばへいつて、じぶんのからだをゴムまりのようにほし草にむかつて投げつけた。ほし草はふわりと、やわらかにあたたく、久助君をうけとった。とたんに、ヒチヒチと音をたてて、ばったが頭の上から豆畑の方へ飛んでいった。久助君は、頭や耳に草のすじがかかったが、とろうとしなかった。ほし草の山は、昼間じゆう太陽にあたためられていたので、そこにもたれかかっていると、おかあさんのふところにだかれていたじぶんを思い出させるような、ぬくとさだった。久助君は、ねこのようにくるいたい衝動しょうどうが、からだの中にうずうずするのを感じた。

「兵タン、すもうとろうかやア」
と、久助君はいった。

「やだ。きのう、すもうしとつて、そでちぎつて、家でしかられたもん」

と、兵太郎君がこたえる。そして、ひざをびんぼうゆるぎさせながら、あおむけに空を見ている。

「んじゃ、かえるとびやろかア」

と、久助君がいう。

「あげなもな、おもしろかねえ」

と、兵太郎君は一言のもとにはねつけて、鼻をキュツと鳴らす。

久助君はしばらくだまっていたが、ものたりなくてしょうがない。ころころと兵太郎君の方へころがり近づいていって、草の先を、あおむいている兵太郎君の耳の中へ入れようとした。

兵太郎君はほらふきで、ひようきんで、人をよくわらわせるが、こういう種類のからかいはあまりこのまない。自尊心じそんしんがきずつけられるからだ。

「やめよオツ」

と、兵太郎君がどなった。

兵太郎君がおこって、久助君にむかってくれば、それは久助君の望むところだった。「あんまり耳くそがたまつとるで、ちよつとそうじしてやらア」

といって、久助君はまた草の先で、兵太郎君の頭にペしやんとはりついた耳をくすぐる。

兵太郎君はおこっているつもりであつたが、くすぐりたいので、とつぜん、ひあつというような声をあげてわらいだした。そして久助君の方にぶつかつてきた。

そこでふたりは、おたがいが、ねこの子のようなものになつてしまったことを感じた。それからふたりは、ほし草にくるまりながら、上になり下になりしてくるいはじめた。

しばらくのあいだ、久助君は、じょうだんのつもりで、くるつていた。相手もそのつもりでやっていることだと思つていた。ところが、そのうちに、久助君はひとつの疑問にとらわれた。どうも相手は、本氣になつてやっているらしい。久助君を下からはねのけるときに、久助君の胸をついたが、どうも、じょうだん半分のあらしの場合の力の入れかたとはちがつている。また、久助君を上からおさえつけるときの、相手のやせた腕が、ぶるぶるとふるえている。じょうだん半分なら、そんなことはないはずである。

相手がしんけんなら、こちらもしんけんにならなきやいけない、と久助君はそのつもりになつて、一生けんめいにやりだしたが、そうするうちに、まもなくまた、つぎの疑問がわいてきた。やはり、兵太郎君は、じょうだん半分と心得こころえてくるっているらしい。久助君の手が、あやまつて相手のわきのしたから、熱ねつっぽいところにもぐりこんだとき、兵

太郎君はクツクツとわらったからである。

相手がしようだんでやっているのなら、こちらだけしんけんでやっているのは、男らしくないことなので、こちらもそのつもりになろうと思っていると、まもなくまた、まえの疑問があたまをもたげる。

ふたつの疑問が交互（こうご）にあらわれたり消えたりしたが、ふたりはともかくくるいつづけた。久助君は顔をほし草におしつけられて、ほし草をくわえたり、ほし草があるつもりでひっくり返ったところにほし草がなくて、頭をじかに地べたにぶつけ、じーんと頭じゅうが鳴りわたって、あついなみだがうかんだりした。

また、しつかりと、複雑に、手足を相手の手足にからませているときは、じぶんと相手の足の区別など、はつきりつかないので、相手の足をおさえつけたつもりで、じぶんのもう一方の足をおさえつけたりしていることもあった。

とつくみあいは、夕方までつづいた。おびはゆるみ、着物はだらしなくなってしまう、じつとりあせばんだ。

なんどめかに、久助君が上になって兵太郎君をおさえつけたら、もう兵太郎君は、ていこうしなかつた。ふたりは、しいんとなつてしまった。二町ばかりはなれた道を通るらし

い車の輪の音が、カラカラときこえてきた。それが、はじめて聞いたこの世の物音のよう
に感じられた。その音は、もう夕方になったということを久助君に知らせた。

久助君は、ふいとさびしくなった。くるいすぎたあとに、いつも感じるさびしさである。
もうやめようと思った。だがもし、これで立ちあがって兵太郎君がベソをかいていたら、
どんなにやりきれぬだろうということを、久助君は痛切つうせつに感じた。おかしいことに、と
つくみあいのあいだじゆう、久助君は、一ぺんも相手の顔を見なかつた。今こうして相手
をおさえていながらも、じぶんの顔は相手の胸の横にすりつけて下をむいているので、や
はり、相手の顔は見えていないのである。

兵太郎君は身動きもせず、じつとしてゐる。かなりはやい呼吸が、久助君の顔につたわ
ってくる。兵太郎君は、いったいなにを考えているのだろう。

久助君はちよつと手をゆるめてみた。だが相手はもう、その虚きよに乗じてはこない。久助
君は手をはなしてしまった。それでも相手は立ちなおろうとしない。そこで久助君は、つ
いに立ちあがった。すると、兵太郎君もむつくりと起きあがった。

兵太郎君は久助君のすぐ前に立つと、なにもいわないで、地平線のあたりをややしばら
くながめていた。なんともいえないさびしそうなまなざしで。

久助君はびつくりした。久助君の前に立っているのは、兵太郎君ではない、見たこともない、さびしい顔つきの少年である。

なんとということか、兵太郎君だと思いきんで、こんな知らない少年と、じぶんは半日くるつていたのである。

久助君は世界がうら返しになったように感じた。そして、ぼけんとしていた。

いったい、これはだれだろう。じぶんが半日くるつていたこの見知らぬ少年は……。

なんだ、やはり兵太郎君じゃないか。やっぱり相手は、日ごろのなかまの兵太郎君だった。そうわかって、久助君はほつとした。

あたりはもう、うす暗くなっていた。着物から草のごみをはらい、おびをしめなおすと、てれくさい気持ちで、久助君は兵太郎君にわかれた。しっけ、ともいわないで。

だがそれからの久助君は、こう思うようになった。——わたしがよく知っている人間でも、ときには、まるで知らない人間になつてしまうことがあるものだ。そして、わたしがよく知っているのがほんとうのその人なのか、わたしの知らないのがほんとうのその人なのか、わかったもんじやないと。そしてこれは、久助君にとって、ひとつの新しい悲しみであった。

青空文庫情報

底本：「牛をつないだ椿の木」角川文庫、角川書店

1968（昭和43）年2月20日初版発行

1974（昭和49）年1月30日12版発行

入力：もりみつじゅんじ

校正：ゆうこ

2000年1月27日公開

2006年1月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

久助君の話

新美南吉

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>